

概要書

：統合型 HTP 法 (S-HTP) に
関する臨床的・発達の基礎研究

三沢 直子

はじめに

統合型 HTP 法（以下、S-HTP と略す）とは、「家と木と人を入れて1枚の絵を描く」という描画テストである。この 20 数年間、さまざまな臨床の場で、精神分裂病、うつ病、境界例、神経症、心身症などの患者を対象として、心理アセスメントのために本法を用いてきた。その一方で、幼児から老人に至るまでの発達的研究も行ってきた。本論文は、統合型 HTP 法の基礎的研究として、これまで集積した資料を分析し、まとめたものである。

第1章 描画テストの研究史：S-HTP の成立過程

子どもの描画に関する発達的研究は、19 世紀後半から数多く行われてきた。それらの研究を土台として、描画を知能検査として用いようとしたのが、Goodenough, F. (1926) の DAM (Draw-a-Man) の研究である。さらに、知能検査だけでなく、人格検査としても研究が進められ、1948 年には Buck, J. が HTP 法 (House-Tree-Person technique) を、1949 年には Machover, K. が人物画テスト (Draw-a-Person test, DAP) を、同年に Koch, K. がバウムテスト (Baum Test) を、次々と発表した。その他にも、20 以上の描画テストが数え上げられ、特に最近は、Hulse, W.C. (1951) によって始められた家族描画テスト (Draw-A-Family, D-A-F) なども盛んに用いられている。

本論文のテーマである S-HTP 法は、Buck (1948) が創始した HTP 法を発展させたもので、元来の HTP 法は、家と木と人を別々に描くものであった。Buck は、この 3 つの課題を選んだ理由については、①年齢の低い幼児でも、その課題になじみ深いこと。②その他の課題に比べて、あらゆる年齢層の被検者が描画対象として非常に好意的に受け入れられると考えられること。③その他の課題よりもずっと率直に自由に言語表現させることができると考えられること、をあげている。

また、HTP 法は、絵を描いてもらうだけではなく、描画後に一定の質問をすることになっており、非言語的・創造的・非構造的な描画と、統覚的・構造的な言語による 2 つの面から、パーソナリティーにアプローチすることになる。

以上をまとめて HTP 法の使用利点に関して、Buck (1948) は次のように述べている。

- (1) 全体的なパーソナリティーの評価が、非言語的アプローチと言語的アプローチの両方によって行われる。
- (2) 描画は比較的プリミティブな方法であり、引き籠もりがちな人や、平均知能より低い被検者によっても容易に表現されうる。
- (3) 家と木と人を描くという行動は、しばしば人を情動的にするので、描画中や描画後、それまで抑圧していたものについて言語化することができる。
- (4) 描画後質問方式 PDI (Post-Drawing-Interview) は、自分の描画作品について、その意義を明確にし、解釈し、連想することを可能にし、またさらに投影するための機会を提供する。

わが国ではまず高橋雅春 (1967, 1974) が、Buck (1948) の HTP テストと Machover (1949) の人物画テストとを組み合わせ、最初に描いた人物と反対の性の人物も描かせる「HTPP テスト」を開発した。また、細木・中井ら (1971) は、HTP 法と「枠付け法」とを合わせて、「多面的 HTP 法」という新たな方法を考案した。さらに、丸野・徳田ら (1975) は、細木・中井らの方法と、Diamond, S. (1954) の技法を取り入れて、「統合 (synthetic) House-Tree-Person 法 (略して Syn. HTP)」をイメージ絵画療法として導入した。

この統合型 HTP 法に関する心理学的な研究として、三上が最初におこなったのが、精神分裂病患者と一般成人の S-HTP の統計的な比較である (三上, 1979)。さらに、事例的研究として、分裂病者の病態変化につれて S-HTP がどのように変化していくかを分析した (三上, 1979)。また、

幼稚園児から大学生までの S-HTP の描画発達を統計的に分析し、精神発達につれて描画がどのように変化していくかを示すと共に、それらの結果と先の分裂病患者の描画特徴とを比較して、分裂病患者の描画特徴が退行現象を示すか否かを検討した (三上, 1981)。

それらの研究も含めて、これまで二十数年間にわたって、本法を用いて行ってきた臨床的研究と発達的研究とを以下にまとめる。

第 2 章 S-HTP の評価方法

この章で示す解釈仮説は、各研究を行ってきた上での、現時点における総合的な結論とも言える。そういう意味では、本来は最後に示すべきものであるが、以下の各研究の考察において、この解釈仮説を引用することが多いために、便宜上、まずここでまとめておくことにした。

構成は、全体的評価、および家・木・人それぞれの部分的評価に分けて、解釈の手がかりとなる描画特徴をまとめた。

第 3 章 S-HTP の研究

3.1 S-HTP の臨床的研究

3.1.1 精神分裂病の研究

3.1.1.2 統計的研究

高崎市に所在する私立精神病院において、昭和 50 年 3 月から 52 年 9 月にかけて S-HTP を施行した分裂病患者 272 名(男子 149 名、女子 123 名)の結果と、対照群としては同市に所在する某企業体の従業員 256 名(男子 137 名、女子 119 名)に対して行った S-HTP の結果とを、統計的に比較した。分析方法は、分裂病群と対照群のそれぞれにおいて、分析項目 105 項目における出現率を求め、また、両群の有意差を見るために、 χ^2 検定を行った。

その結果、分裂病群と対照群の間で分析項目 105 項目のうち、 $P < .001$ では 58 項目 (そのうち対照群に多かったのは 23 項目)、 $P < .01$ では 11

項目（同、4項目）、 $P < .05$ では18項目（同、8項目）、計87項目（同、35項目）に有意差が認められた。それらの結果から、分裂病患者のS-HTPの特徴として、次のような点が確認された。

- 1) 全体的評価項目では、非統合性、遠近感の欠如、画面の使用範囲の狭小化・真空化、付加物の欠如、歪みなどが、出現率・有意差ともに高いことが確認された。しかし、従来の症例研究で強調されてきた奇妙な表現、シンメトリー、幾何学模様化などは、有意に多く出現したものの、その出現率はそれほど高くはなかった。
- 2) 課題別では、「人」は最も中心的に、丹念に描かれる傾向があり、登場人物は1人、正面向き、直立不動型、過大などが、分裂病者の一般的描画特徴として確認された。それに対して、「人」の記号化や後ろ向き像、顔の省略などは、対照群に有意に多く出現した。
- 3) 「家」はもっとも小さく、粗雑に描かれる傾向があり、ドアや窓のない家が目立った。また、3面の壁、中が透いて見える家、線が縦横に引かれた家、基線のない家など、非現実的な「家」が有意に多く出現した。
- 4) 「木」は枯れ木などの寒々しい木や空白な幹、単線の枝や幹、上方不交幹、上方直閉幹などが有意差を示したが、両群での差異は最も少なかった。

以上の結果から、分裂病者を診断する上で、本法はかなり有効な検査であると思われた。

3.1.1.3 事例的研究

このS-HTPは、各病棟において3,4か月おきに継続してとっていたために、ケースによっては病態の変化につれて、さまざまな描画の変化が見られた。それらの中から、回復への変化を示した6ケースと、悪化への変化を示した6ケースを通して、病態変化につれて絵がどのように変わるかを検討した。

まず、回復へのプロセスをたどった描画変化をまとめると、次のようになる。

急性期の幻覚妄想状態など、症状がかなり激しく出ている時期に描いたものは、画面いっぱいに描かれていて、エネルギー水準も高く、また、統合性や遠近感、動きもあるなど、構図的には正常者の絵に近いものが多く見られた。ただし、内容的には、妄想的・幻奇的なものが多く、不安感や緊張感を示すような濃い描線や陰影付けがなされ、形態も何らかの歪みを伴うなど、一見して健常者の絵とは異なり、病的な印象を受けるものが多い。

そして、入院後しばらくして急性症状がほぼ消失し、一応、病的安定を得た寛解期初期の絵は、妄想的内容はなくなり、濃い陰影付けなどもみられず、筆圧も安定する。ただし、急性期の絵に比べて、描画範囲が縮小したり、統合性・運動性がなくなるなど、全体的にエネルギー水準が低下し、また、没个性的になって、一見して「貧困な絵」に変わる。

さらに回復に向かって、完全に寛解した段階では、安定した描線で画面一杯に統合的に描く、遠近感が加わる、課題以外の付加物が加わるなど、退院時には、ほぼ健常者の絵に近いものとなった。

それに対して、悪化へのプロセスをたどったケースは、統合的な絵が羅列的になり、遠近感がなくなる、付加物がなくなるなど、回復への変化とは逆の変化を示した。また、個々の描写も非現実的・図式的な絵に変わり、支離滅裂でばらばらな描写になったり、妄想的な内容が表れることもあった。

総じて、破瓜型分裂病の場合は病気の進行につれ、描画内容が貧困化し、非現実的・図式的な描写となって、それが常同的に繰り返される傾向がある。それに対して、緊張型・妄想型の場合は、憎悪期には、妄想的・幻奇的な絵が多いが、症状が収まった段階では健常者に近い絵も見られる。しかしいずれの場合も、人格荒廃がかなり進んだ段階では、極めて貧困で、形態も不確かな絵になってしまうことが多い、と言えよう。

3.1.2 その他の精神障害

以下の精神障害に関しては、まだ十分な統計的比較をするには至っていないが、これまでのデータからそれぞれの特徴をまとめると、次のような点が挙げられた。

3.1.2.1 うつ病

都内の某総合病院精神神経科を受診し、テスト時に、躁うつ病、うつ病、あるいは“うつ状態”と診断されていた患者 38 名の S-HTP を、エネルギー水準を判定する上で最も参考となる「描画サイズ」と、総合的な人格水準を判定する上で最も参考となる「統合性」を手掛かりとして、4 群に分類した。一方、その 4 群の臨床的な特徴を比較するために、38 名の各患者に関して、内因性・心因性の分類、および抗うつ剤の効果、予後の 3 点に関して、各担当医に判定を依頼した。その結果、次のような傾向が認められた。

- ・描画サイズが大きい方が、小さいよりも、心因性のうつ状態である可能性が高い。
- ・全体的に統合的である方が、羅列的であるよりも、予後が良好である可能性が高い。
- ・特に、統合的で描画サイズが大きい場合、心因性のうつ状態である可能性が高く、逆に、羅列的で描画サイズが小さい場合は、内因性うつ病の可能性が高い。
- ・羅列的な絵を描いていて、予後が不良の場合は、非定型精神病の可能性も考えられる。

以上の結果から、表面上は一様に“抑うつ状態”を呈しながらも、心因性のうつ状態から内因性うつ病、さらには非定型精神病までをも含む患者群を判別する上で、S-HTP は、かなり有効な手掛かりになり得るものと思われた。

3.1.2.2 境界例

以下の特徴は、これまでの事例的研究からまとめたものである。

- ・ロールシャッハ・テストにおいては、かなり病的な反応が見られる場合も、S-HTP においては、基本的な描画構造は健常者と同じパターンが示されることが多い。
- ・具体的には、統合的で、遠近感のある絵が描かれることが多く、分裂病者の羅列的な絵とは異なっている。
- ・また、部分的にはやや不調和な描写があっても、全体的には許容範囲内であり、基本的に現実検討力の低下を示すものは少ない。
- ・さらに、分裂病者の没個性的でパターン化された絵とは異なって、各々が個性的、表出的で、各人の内的状況を象徴的に表していることが多い。
- ・一部の絵を除けば、画面全体を使用し、分裂病者や神経症者の絵よりもエネルギー水準の高い絵が多い。
- ・ただし、内容的には神経症者の絵よりも全体的に混沌とした印象を与えるものが多い。
- ・具体的には、樹冠が大きく広がった木を描いていたり、うっそうと茂った森や林を描いているものも多く、心の無意識的なレベルが活性化していることが示されている。
- ・家は粗雑、あるいは過度に美化して描かれるなど、家族関係をはじめとする人間関係に何らかの強い葛藤があることを示しているものが多い。
- ・自己像は、一部を除いて、比較的明確に描かれることが多い。
- ・ロールシャッハ・テストでは境界例のパターンを示している場合でも、S-HTP において現実検討力の低下が著しい場合は、後に分裂病に移行していく可能性もある。
- ・逆に、ロールシャッハ・テストではかなり低水準を示している場合でも、S-HTP において良好な結果を示している場合は、その後の治療経過が比較的順調に進むことが多い。

3.1.2.3 神経症・心身症

以下は、事例的研究から特徴をまとめたものである。

- ・全体的に統合性は良好である。
- ・一般的に描画サイズは小さくなる傾向がある。
- ・付加物は少なめである。
- ・自己像が曖昧で、記号化されていたり、シルエット化されていることが多い。
- ・筆圧が弱い、不安定であることが多い。
- ・全体的にエネルギー水準は、分裂病よりは高いが、境界例よりは低いものが多い。
- ・総じて、境界例の自己表出的な絵に比べると、表現が抑制的であるが、分裂病よりは個性的な表現が見られる。

また、一流企業の付属病院において、エリートコースを歩んできた人々の中で、何らかの心身症を生じた患者の描画特徴として、次のような共通点が認められた。

- ・与えられた課題のみを描き、受動的傾向が顕著である。
- ・内容的にも極めて貧困で、情緒的な豊かさがほとんど感じられない。
- ・機械的・図式的描写が多く、日常的な生活実感に乏しい空疎な絵が多い。
- ・描線や形態が不確かなものが多く、自己不確実感が示されている。
- ・人は記号化、シルエット化、後ろ向きなどになっており、没個性的である。
- ・家は閉鎖的で、住まいとしての暖かさに欠けるものが多い。
- ・木の樹冠は描かれているが、幹が一本線や柱のようにになっており、基本的な生命力に欠ける。

3.2 S-HTP の発達的研究

3.2.1 統計的研究

S-HTP を施行可能な下限の幼稚園年長児から大学生にいたるまで、年長児 68 名、小学生低学年(1-3 年)128 名、小学生高学年(4-6 年)114 名、中学生(1-3 年)214 名、高校生(1-3 年)250 名、大学生(1-4 年)199 名に行った S-HTP を対象として、分析項目 154 項目について各群の出現率を求め、また、次の群との有意差を χ^2 値によって求めた。

その結果、年長児と小学校低学年の間では53項目、小学校低学年と高学年では62項目、小学校高学年と中学生の間では75項目、中学生と高校生の間では38項目、高校生と大学生の間では22項目に有意差が見られた。

これらの結果は、これまでの描画発達の研究で言われてきた、なぐり描き期から、図式画期、写実画期、美術的絵画期にいたるプロセスを、そのまま統計的に支持するものであり、それぞれの発達段階の特徴として、次のような点が明らかとなった。

- 1) 幼稚園の段階で、すでに単なる課題の羅列ではなく、空や地面で統合性を図り、草花太陽、雲などの付加物も加えて、1つの場面を描こうとしている。しかし、それらのつながりは乏しく、地面に並列され、相互の大きさのバランスも悪く、全体的に写実的というよりも、図式的・観念的な描写となっている。
- 2) 小学校の低学年の絵は、まだ全体的に図式画期を脱しておらず、羅列的で大きさのバランスが悪い絵も多い。しかし、高学年に入ると、平板な絵から立体的な絵に変わり人物にも動きが加わり、描線もスケッチ風の描線になるなど、全体的に統合的、写実的な絵が増える。
- 3) 中学生になると、発達的にはほぼ完成の域に入り、以降は大きな発達的变化は見られなくなる。また、この時期、急にそれぞれの絵が多様化し、描き手の個性が絵に反映されるようになる。それゆえ、この時期から S-HTP が発達検査としてよりも、人格検査としてより有効性が増す。

- 4) 高校生は、立体的・写実的な表現がさらに洗練され、抽象画やデザイン画などが増える以外は、中学生の絵とそれほど大きく変わらない。また、この時期、一時的に描画サイズが小さい絵や、陰影付け、顔のない人、人の記号化など、自信のなさや無力感、防衛的傾向などを示す項目の出現率が上がる。
- 5) 高校生で一時的に見られた上記のような神経症的傾向は、大学になってすべて有意に減少する。一方、統合性や遠近描写、大きさのバランスなど、有意差を示すほどではないにしても、大学生にいたるまで上昇し続けた項目はかなりあり、描画全体のバランス・調和はさらに増した。またこの時期、男女関係や仕事をテーマにした絵も目立つようになる。

以上のように、中学生以降の変化は徐々に小さくなるにしても、大学生にいたるまで S-HTP における発達的な変化は見られた。

3.2.2 事例的研究

9 例のケースを中心に、子どもの心が S-HTP にどのように映しだされるかを検討した。その結果、言語表現が不十分で、しかも絵を描くことには日常的に慣れ親しんでいる子どもにとって、S-HTP はより鮮明に子どもの内的世界を映し出すために、有効な手段であるように思われた。また、少し解釈を加えるならば、子どもであっても、そこに表現された自分の心がどういう状態であるかを、予想以上に理解できることがわかった。家族に対しても同様で、他のロールシャッハ・テストなどとは異なり、素人でも理解しやすく、視覚的に直接心に訴えかけるために、それだけ家族を動かす力があるように思われた。

知的障害児に関しても、知能検査として有効であるだけでなく、容易に施行できる人格検査として、内的安定性や積極性、活動性、自信の有無などを知る手がかりになるものと思われた。また、強迫性や癲癇発作の可能性など、精神障害の検出にも有効であることが示唆された。

第4章 S-HTP についての総括的な考察

4.1 S-HTP の有効性について

4.1.1 テストバッテリーの中での描画テストの役割

- ・描画テストは非言語的表現であるがゆえに、言葉では表現しがたい、心の奥底にある未分化な感情を表現しやすい。
 - ・ロールシャッハ・テストや TAT などのように、与えられた刺激に対してどう反応するかという人格の「受身の過程」に対して、描画テストはどうか積極的に反応を構成していくかという人格の「表出過程」が投影される。
 - ・常に結果はまとまった形 (Gestalt form) で与えられるので、熟練した検査者にとっては、被験者の全人格が Gestalt として、直接理解されやすい。
 - ・他の検査に比べて、検査の施行が簡便で、集団検査も可能であるために、スクリーニング法として便利である。
 - ・再検査による影響が比較的少ないので、その時々の状態の継時的な記録として、また、治療的な効果を見る上で有効である。
 - ・観察者の主観的歪曲を通さずに、より純粋なサンプルとして得られる。
 - ・非専門家に対しても、結果を説明しやすく、理解してもらいやすい。
- 一方、描画テストの欠点としては、客観的な判断が難しく、主観的解釈に陥りやすい、という点に尽きる。今後も、様々な観点から客観的・統計的な検証を加える必要がある。

4.1.2 他の描画テストとの比較

従来別の描きの HTP 法に比べた場合、本法は以下のような利点をもつものと思われる。

- 1) HTP 法は 3 枚あるいは 4 枚描くものに対して S-HTP は 1 枚なので、受検者に与える心理的負担が軽度で、エネルギー水準が低下した人や描画に抵抗がある人でも、より気楽に受検しやすい。また、検査者

にとっても施行が簡便で、集団検査もしやすく、フィールド・ワークにも便利である。

- 2) 家・木・人それぞれをどのように描いたかによって得る情報のほかに、家と木と人をどのように関連付けて描いたかを見ることによって、新たな情報が加わる。そして、この家と木と人の相互関係にこそ、自己と外界、意識と無意識などの関係性がより直接的かつ鮮明に投影されるので、より重要な判断基準となる。
- 3) 被検者は家と木と人をどのように描くかに加えて、それらをどのように組み合わせ描くかも自由であるため、より自由度が高まって、被検者の心的状態がより直接的に表現されやすい。検査の構造的から考えるならば、S-HTP は個別の課題画と自由画の中間に位置するものと思われる。
- 4) 以上のように、自由度が高まり組み合わせも複雑になるので、客観的な判断がさらに困難になるように思われるが、実際にはより信頼性の高い判定が可能となる。なぜなら、これまでの描画法の信頼性・妥当性に関する研究において、描画の部分的特徴よりも全体的な評価の方が信頼性が高いことが証明されており、S-HTP は家と木と人との相互関係において、より多様な全体的評価が可能だからである。

また、人物画法、バウムテストなどに比べると、S-HTP の方が精神的な成熟の度合いをより長期にわたって測ることができるが、個々の描写に関しては、簡略化が起きやすいために、きめこまやかな情報を得ることができないことが欠点となる。

動的 HTP 画については、いろいろな制限を加えるので、より確実に豊富な情報が得られる可能性があるが、病的レベルをはかるなど鑑別診断を目的として行う場合は、S-HTP のように、被検者の自由な選択に任せたいほうがより有効であると思われる。

家族画との比較に関しては、被検者の家族関係をより直接的に知る上では家族画のほうが有効であるが、家族間の葛藤が大きい場合には、よ

り抵抗が生じやすい。その点、S-HTP は間接的であるぶん抵抗が少なく、象徴的な形で家族関係が示される場合が多い、と言える。

いずれにしても、それぞれの描画テストの特性を生かしたテストバッテリーを組むことが望ましいが、それをどのように組むかに関しては、今後の研究課題として残された。

4.2 S-HTP における統計的アプローチと現象学的アプローチ

S-HTP の客観性を高めるために、今後もより綿密な統計的研究を重ねていく必要があり、その延長線上に、S-HTP の標準化・尺度化ということも可能性として考えられるかもしれない。

しかし、その一方で、描画テストを利用する場合に、Jaspers (1913) が、“我々の科学的根本態度は、経験的探求によって現れるすべてのものを率直に受け入れることにあり、人間として存在を通分して一つの尺度として見ようとする誘惑を防ぐことにある”と述べているのは、重要なことと思われる。

Machover (1949) は“「一人の人間を描きなさい」といわれて描いた個人の人物画は、その個人の衝動、不安、葛藤や補償的諸特徴と密接に関連している。ある意味では描かれた画像は、すなわちその人なのだ”と述べてるが、描かれる画像は基本的に様々な要素を含んだ複雑なもので、その複雑さこそ人間存在の複雑さをそのまま反映しているとも言える。

それゆえそれを点数化・尺度化することによって割り切ってしまうより、絵から得られる多様な情報をできる限り鋭敏に読み取る訓練を重ねることは、描画テストを有効利用する上で、ぜひとも必要と思われる。

そのためには、現象学で言う「事象そのものへ」、つまり、先入観なしに、描かれた絵そのものを虚心に見ることから始めて、その絵が語りかけてくることを鋭敏に感受し、それをより適切な言葉に置き換えていく。そういう努力を続けることは、統計的研究を重ねることと同様に、大切であると思われた。